川井クリニックニュース

平成21年第3号

2009年7月11日発行

私の半世紀-1 （筑波大学講師就任前まで）

院長　川井紘一

昭和18年2月22日、前橋の紅雲町で生まれました。父親は高知生まれでしたが、「理研」という当時の新興軍需産業に入社し、新前橋駅前にある工場に勤務していました。理研コンツェルンの解体、前橋工場の閉鎖により父が東京の関連会社に移ったため、小学校3年生時より浦和に住みました。

浦和高校を卒業する時にはどんな職業に就くかは殆んど考えていませんでした。考えていたのは、浦和高校と市立浦和高校の白熱したサッカー試合を身近に見て、中学時代には早生まれだったこともあり、いつも身長が前から 2、3番目で体力がないために出来なかったサッカーの部活を、大学に入ったらやろうということでした。父は理系の人間は、物事を総合的に考える力に欠けると常々話し、自分と同じ法学部を勧めるので自分も東大の法学部に入り、サッカーをやろうと考えていました（国立大のサッカー部はレベルが低いと考えて）。しかし、入試に失敗、かかりつけ医であった先生に入試に必要な診断書を書いて貰いに行った時「医者も良いよ、二期校の東京医科歯科大学にも願書を出しておいたら」という助言を貰い、願書を出した東京医科歯科大学に入学することになりました。

東京医科歯科大学での2年間の教養課程は市川の国府台で過ごしました。国府台は江戸川沿いの高台で、軍隊の跡地でした。浦和からの遠距離通学の毎日でした。40名の医学部学生と80名の歯学部学生が半々ずつ60名のA組、B組に分かれ過ごし、歯科の友人が大勢出来ました。サッカー部には早速入部し、練習試合にも出させて貰いました。一緒に入部した医学部2名、歯学部4名はいずれも高校時代にサッカー部の経験はありませんでしたが、全員レギュラーにもなれ、6年間の付き合いとなりました。

安保反対運動が入学早々始まっていました。自治会主導の政治運動には、運動部としての練習に追われ参加しませんでしたが、部活動のまとめ役であった学友会には参加し、大学祭、運動会、東日本医学部体育大会の評議員として他大学の評議員との交流が生まれ、今でも付き合いが続いている方もいます。土浦協同病院院長の藤原先生は私の1年先輩であり、大学祭や運動会を一緒にとり行った仲です。サッカー部員としては、常に勝利を目指し練習を企画、浦和高校の練習に参加したり、下級生をサッカー協会の講習会に参加させたり、東京オリンピック関連の全日本の試合を観たりとレベルアップに努めました。私がキャプテンの時は意欲が空回りし、色々な大会で優勝を逃しましたが、冬の全国大学選手権大会に出場した際は新戦術を用い、第1回戦は北大の全学に勝つことが出来ました。2回戦は、当時の強豪校であった名古屋学院大に惜敗しましたが、6年生まで現役を続け、6年生時には春の医歯薬一部リーグや夏の東日本医学生大会など全ての大会で優勝しました。サッカーが第1であった6年間の大学生活でしたが、5年、6年時にはスキー同好会を部に昇格させるため、学友会役員として長期合宿にも参加、東日本学生大会にも出場しました。それが今でもスキーが出来る下地となりました。

卒業当時、青医連(青年医師連合)によるインターン制度廃止運動がくすぶってはいました。冬休みのスキー部の合宿を終え、いよいよ卒業試験と張り切って大学に戻るとクラス会が開かれ、卒試を出来れば受けたくないという人間も引き込み卒業試験ボイコットが決定されました。これがその後の数年に渡った激しい学生運動の始まりでした。私は6年生時の夏休みに体験学習として行った信州の佐久総合病院の心臓外科に行こうと考えていましたので(当時は「白い巨塔」で語られるように医局制度が日本の医学医療の発展を阻害しているとされていたので非入局を志向していました)、ストライキの中止を画策し、夏休み頃にはそろそろストを止め勉強したいというノンポリ学生を巻き込み、共闘会議を乗っ取り“合法的に”ストを終結させました。全国誌に顔写真とともに報道され、フジテレビのモーニングショウにも出演しました。卒業試験を終え、卒業したのは12月でした。ストライキ中、学生時代に表面的にしか理解出来なかった生化学を知ろうと生化学教室に出入りしていましたが、ここで学問の奥深さを知るとともに、臨床に行

っても大学との研修交渉にエネルギーを費やすと考え、生化学の大学院に入りました。

生化学の大学院では細胞膜の生化学に取り組みました。細胞膜という水にとけない構造物をこれまでの水に溶けている物質を扱う方法で研究するので、本質にはせまれない4年間でした。それでも実験と勉学にどっぷりつかる4年間を通して、学問をすることの楽しさを学び、研究し独自の考え方をもつことの大切さを知りました。大学院を卒業し、助手に就任した直後にスウェーデンのストックホルムで国際生化学会の学術集会がありました。ここで細胞膜研究に関する何か新しい研究方法が得られれば生化学研究を続け、なければ臨床医になろうと考え、日本生化学学会が企画した1か月間のヨーロッパツアーに参加しました。ツアーといっても行きと帰りの飛行機が決まっているだけで、自分で行先を決め(国家公務員なのでベルリン自由大学、オックスフォード大学、パスツール研究所を訪問し、生化学研究者と交流する予定を組み、先方からの受け入れ受託書を必要としました)、北ヨーロッパで初めての海外一人旅を行いました。ベルリンの壁ができた直後のヨーロッパで、色々な体験をした1か月でした。この1か月間の旅行を通し、生化学を続けるのではなく、生化学でやったことが活かせる内科に転向することを決めました。東京医科歯科大学の第3内科に入局し、半年間の大学附属病院での研修の後、長野県の鹿教湯温泉病院や東京都職員共済青山病院で諸先輩から内科の基礎を学びました。

桐の木会活動報告

5月17日(日)に平成21年度桐の木会「総会」を行いました。特別講演には筑波大学 内分泌代謝・糖尿病内科の高橋昭光先生をお招きし、クイズ形式で生活習慣病についての知識を楽しく学ぶことができました。昼食は当院管理栄養士が献立発案し、手作りした弁当を用意。旬の食材を盛り込んだお弁当は大好評でした。昼食の後には参加者全員で、筑波大学周辺を散歩しました。

次回は7月29日(水)に調理実習を行います。土浦市蕎麦打ち愛好会の指導の下で、本格的な蕎麦打ちを実施します。是非ご参加下さい。

日本糖尿病学会年次学術集会

第52回を迎える日本糖尿病学会年次学術集会が、5月21日～24日の4日にわたり、大阪で開催されました。5月15日に大阪で新型インフルエンザ感染者が出たため、参加者の減少が予想されていましたが、約 6000 名が参加し、例年同様に活発な学術集会でした。当院からは院長が「当院において10年以上の治療歴がある2型糖尿病患者の診療アウトカム」という演題で、現在も当院に通院されている396名のデータをまとめ発表しました。

私は『食後血中 CPR 測定の意義とそれを用いた2型糖尿病患者インスリン分泌の経年変化に関する検討』について発表しました。発表準備は、不慣れなこともありとても大変でしたが、患者さんのこれまでの治療経過を学ぶ良い機会になりました。学術集会ではたくさんの医師やコメディカルの方の発表を聞くことができ、幅広い知識の習得ができました。今後この知識を診療の場で活かしていきたいと思います。

(臨床検査技師　横瀬　久美)

自動音声電話について

操作方法についてよくあるご質問や、間違えやすい点についてお答えします。

◆ 診察券の番号とパスワード

診察券の番号の後に#を押さないと正しく認識されません。また、パスワードは誕生日ですが、昭和などは除いた月日を4桁で入力して下さい(昭和18年2月22日なら0222です)

◆ 電話をしても繋がらない

電話が使用中の時は話中の音が流れます。またご自宅のお電話がダイアル回線の場合は繋がりませんので、携帯電話からおかけ下さい。

◆ 予約変更をする時の希望日時の入れ方

2月22日の午後3時15分に変更したい場合は、「希望の日を入れてください」の音声の後に 0222 を、「希望の時間を入れてください」の音声の後に 1515 を入れて下さい。

◆ 希望の日時がとれない

希望の日時に予約の空きがないと予約は取れません。予約の空きがない日しか来院できない場合は、これまで通り予約外の来院でお願いします。また、予約は先に延ばせる期間を予め制限させて頂いております。制限期間内での来院をお願いします。

詳しくは自動予約システムご利用の手引き、または予約システム活用Q&Aをご覧下さい。

また、操作方法に関するお問い合わせを代表電話に頂く際は12時から12時30分、午後は17時30分から18時(土曜は16時30から17時)にお願いします。